



雪道での思いやりの心

校長 齋藤 博敏

2月6日（木）、猛烈な寒波が日本全体を覆い、外は暴風雪となっています。
明日の6年生のスキー教室は、大丈夫だろうかと心配しながらこの原稿を書いています。

雪が降ると、いつもは車2台が余裕ですれ違える道でも、道幅が狭くなっている所があります。そんな状況で車がすれ違う時、ほとんどの運転者は、少しでも道幅が広がっている所で、対向車が通り過ぎるのを待ちます。互いに軽く会釈をしながら、雪道を通り過ぎます。

「待っていてありがとうございます。お陰で通れます」
「いやいや、お互い様ですよ。大変な雪道、お互い事故なく運転しましょう」等、心の声が聞こえてくるようです。
こういった場面に会うと、温かい気持ちになります。これは、互いに相手のことを思いやっている姿だからです。



近頃は、他の人と自分との間に一線を引き、一方的に相手を非難することがあまりにも多くなっていると思うときがあります。相手や当事者の大変さを考えず「自己主張した者勝ち」になっているような気がします。

- ・お店で、「自分は客だ、サービスが悪い」と店員にわがまま要求を突き付ける。
- ・職場で、「給料を払っているのだから言うことを聞け」と無理難題を押し付ける。
- ・事件や事故を伝えるマスコミの報道で、片方の側にだけ立ち、もう一方の側のことを考えずに、意見が述べられる。（マスメディアや SNS 等を通じて言われると、一方的により側悪い側が決まってしまう。悪いとされた方は、いつまでも非難と偏見に苦しむ）

自分の都合の悪いことは触れず、相手が悪いんだという主張をするのは、子どもにはよくあることです。大抵は大人からの適切な指導・助言によって、成長するつれて視野が広まり、多様な考え方ができるようになっていくものです。

一方的に相手の非を訴えるだけでは、相手との間に何かギスギスした感覚が残ります。「こっちだって一生懸命やっているのに」と言われた方は、言った人に対し、いやな感情を抱きます。

社会情勢が不安定な今、自分が生きるだけで精一杯になっているのかもしれませんが、でも、未来を生きる子どもたちに、今の大人のその姿だけ見せていることでよいのかなと懸念することがよくあります。

★知っている人には、挨拶の声を掛ける。

★互いに相手のことを推し量って、労いながら生活する。

雪道でのすれ違いのような、人間本来の思いやりに満ちた行動が求められている世相だと感じています。そういう行動がとれる人が育っていく佐々木小学校にしたいと考えています。